

特集 へたね・種 へ

植物の育成になぞらえた育見論

藤田 博子

幼児教育の父と呼び親しまれるフレーベル (Friedrich Fröbel, 1782-1852) が植物の育成になぞらえた育見論を提唱し、その理念に基づいて教育の施設を「幼稚園 Kindergarten」と名付けたのは周知のところであります。この「おさなごの花園」命名の理念について、フレーベルは、その著『続・幼稚園教育学 2: Pädagogik des

Kindergartens』の中で、「神の保護と洞察のすぐれた園丁の配慮のもとにある庭においては、植物が自然と調和して育てられるように、このドイツ幼稚園では、人間という最も高貴な植物、すなわち人類の萌芽でありまた一員である子どもたちが、自己の精神および自然と一致して教育されるはずであり、またそのような教育のための道が一

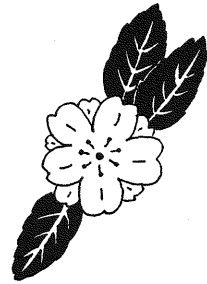
「一般的に示され開かれるはずである」と述べています。ここでは、幼子を花園の花々に、保育者はすぐれた庭師になぞらえられ、個々の幼子が持つて生まれた天与の可能性に恭しく仕え、その可能性を精一杯開花させてあげることが保育者の使命とされたのです。

このように、育児を植物の育成になぞらえる思想は、洋の東西を問わず古来から受け継がれてきた思想であり、書物を通して知り得る限りにおいては、古代ギリシアにその源流を遡ることができません。

人類の歴史以来、営々と繰り返されてきた子どもを育むという素朴な営みは、時代によって、その観点が変遷していますが、その歴史を幾世紀にもわたる長いスパンで俯瞰するとき、そこには、植物の育成になぞらえた育児論が、あるときは本流となり、あるときは支流となり、あるときは、

伏流となつて、太古から悠然と流れていることが認められるのです。それは、また、その時代の人びとの自然観と大きく纏われていることがわかります。

こうした古代ギリシアに源流をもつ、自然法則の尊重や合自然の思想に裏打ちされた育児論は、ルネッサンスを経て、ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) に手渡され、自然主義教育へと発展することになります。ルソーは、古代ギリシア時代にヘシオドスが [待 (μάγειρον) とは、決して消極的なことではない。と説いたように、]「消極的教育法 L'education négatif」の有する積極的の反面を説くのです。やがてこうした思潮は、幼稚園の創設者であるフレーベルの教育思想の源流となり、彼は、子どもを草花になぞらえて、その教育施設を「幼子の花園 Kindergarten」



と名付けたのでした。

以上のように、古代ギリシアの時代から、子どもの教育は植物の育成になぞらえられてきました。植物の育成において最も重要なことは、適時ということです。それは、農事における時宜に通じるものです。ヘシオドスは、農耕の時宜を得るためには、的確な洞察と予測とが要求されると説くのですが、この原理は教育の根本原理に通じるものであるといえましょう。時宜を知るといふことは、子どもをよく洞察し、発達を的確に予測し、理解しなければなりません。そして、それはまた、時機を待つということの大切さをも示唆し

ています。

さらに、植物の育成論において、提唱される重要な要件は、個々の植物の種子が潜めもつ、内発的発達を尊重することです。フレーベルは『幼稚園教育学 *Paedagogik des Kindergartens*』の中で、「生まれたばかりの子どもは、あたかも親木から落ちてきた種子のなかの熟した核のように、自分自身のうちに生命をもっており、また、種子の核と同じように、その生命を、一般的な生命体との発展的な、だがますます精神的な関連において、自己活動的にうちから発展させるものである。」と述べています。真冬に向日葵の花を咲かせようとしたり、すみれの茎に薔薇の花を咲かせようとする園丁はいないでしょう。樫の木に林檎の実を望む農夫はいないでしょう。賢明な園丁や農夫であればあるほど、個々の植物の内発的な発達の力を信じて、個々の植物が望む環境を整

え、間接的にその開花や結実を援助することでしょう。そして、プラトンが危惧する、ギリシア神話のアドニスの園のような子どももの促成栽培は決して望まないでしょう。植物の育成にしても、子どもの教育にしても、成長や発達に必要な時間を、そのものが要求するだけ与えることが必要なのです。

ヘシドスが謳うように、「待つ *hupochōro*」とは、決して消極的なことではないのです。私たちは、待つという、消極的にして積極的な教育の方法を植物の育成に学ばなければならないといえましょう。

『幼稚園教育要領』第一章総則1に示された「環境を通して」という幼稚園教育の基本は、まさに、庭師が種子の萌芽を待つように、望ましい環境を準備して、子どもたちの内発的な発達を間接的に援助するようにとの指標なのです。そのため

には、子どもをよく観察し、子どもへの的確な洞察と発達への理解が必要となることでしょう。ヘシオドスが謳うように、種子を育む農事と育児とは、その精神を同じくしているのです。

(大阪芸術大学短期大学部)

参考文献

- 1 フレーベル著、莊司雅子・藤井敏彦訳『続・幼稚園教育学』玉川大学出版部 一九八一年
- 2 フレーベル著、莊司雅子・藤井敏彦訳『幼稚園教育学』玉川大学出版部 一九八〇年